

『# 憧れ写楽』（著）を読んでみた。著者は小説家で演劇の原案も提供する。ペンネームの谷津矢車は実家の家紋が八つ矢車であることに由来。『蒲生の記』で第18回歴史群像大賞の優秀賞を受賞。2013年に『洛中洛外画狂伝』でデビュー。

NHKの大河ドラマ『べらぼう』のためか、蔦屋重三郎や写楽の本をよく見かけるようになった。

「東洲斎写楽の正体」は猿楽師、斎藤十郎兵衛であると結論は出ていると私は思っていた。しかし、本書は、6枚の大首絵については、斎藤十郎兵衛が描いていないという。では誰が描いたのかという謎を追う話になっている。そうすると写楽はふたりいたことになるのか。

「東洲斎写楽」は約10ヵ月で絵を描いて姿を消したと言われている。「写楽」だと噂される猿楽師、斎藤十郎兵衛のもとを訪れると、斎藤の口から「東洲斎写楽の名で出た絵のうち、幾枚かは私が描いた絵ではない」と発言。そこで、それを知った老舗板元の喜右衛門は、喜多川歌麿とともにもう一人の写楽探しに乗り出す。しかし、写楽を売り出した蔦屋重三郎に探索を妨害される。果たして、本物の写楽の正体とは。そして、蔦屋重三郎と写楽との関係は如何に。この時代の文化人たち（大田南畝、山東京伝、歌川豊国など）、も次々と登場する。

私はNHKの大河ドラマは見ないが、蔦屋重三郎を主人公とする『べらぼう』を観る人には参考になるかもしれない。

東洲斎 写楽は、江戸時代後期の浮世絵師。約10か月の短い期間（1794年5月～1795年1月）に役者絵等の145点余の作品を版行したのち、忽然と姿を消した謎の絵師。様々な研究がなされ、阿波徳島藩お抱えの能役者斎藤十兵衛とする説が有力。写楽作品はすべて蔦屋重三郎の店から出版されたが、後になるほど急速に力の減退が認められ、精彩を欠き、作品における絵画的才能や版画としての品質は劣っている。しかし、長らく斎藤十郎兵衛の存在を確認できる史料が見当たらず、また能役者にこれほどの見事な絵が描ける才能があるとは考えづらかったことから、「写楽」とは誰か他の有名な絵師が何らかの事情により使用した変

名ではないかという「写楽別人説」が数多く唱えられるようになった。蔦屋が無名の新人の作を多く出版したのは何故か、前期と後期で大きく作品の質が異なるうえ、短期間で活動をやめてしまったのは何故か、などといった点が謎解きの興味を生んだ。別人説の候補として多くの人物の名があげられた。しかし研究によって斎藤十郎兵衛の实在が確認され、八丁堀に住んでいた事実も明らかとなり、平成時代には再び写楽＝斎藤十郎兵衛説が有力となっている。